

氏名	上條 菜美子
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 8202 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ストレスフルな体験における意味づけ過程の精緻化

主査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川 進太郎
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充
副査	筑波大学教授	文学博士	松井 豊
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮 容子

論文の内容の要旨

上條菜美子氏の博士學位論文は、ストレスフルな体験をしてから意味を見出すまでの思考過程（意味づけ過程）の精緻化と、意味づけ過程の新たなモデルの提案を目指し、実証的検討を行ったものである。論文は大きく三部構成となっており、第Ⅰ部が理論的検討、第Ⅱ部が実証的検討、第Ⅲ部が総括である。

まず、第Ⅰ部の理論的検討は第1章～第3章からなり、第1章では意味づけに関する理論的背景を、第2章では意味づけの構成要因と影響要因を、そして第3章では本論文の目的をまとめている。本論文の目的を端的に示せば、侵入的熟考および意図的熟考という2種類の反すうの機能を明らかにすることと、これら2種類の反すうの影響要因を、認知／感情／社会・環境の観点から明らかにすることである。

続く第Ⅱ部の実証的検討は、第4章～第7章からなっている。第4章では、認知および感情の観点から意味づけ過程を精緻化している（研究1～研究4）。【研究1】では、場面想定法による質問紙調査を実施している。その結果、出来事が自分にとって脅威であると評価するほど、ストレスフルな体験に関する反すうが促進され、意味生成に至ることを示している。【研究2】では、実際に起きたストレスフルな体験を対象に回顧法によって検討している。その結果、体験当時に意図的熟考をするほど、肯定的な意味を見出しやすく、一方で、その後の侵入的熟考も促進することが示されている。また、体験当時の侵入的熟考はその後の反すうや意味と無関連であったが、ある程度時間が経っても侵入的熟考が高い場合は、見出した意味の内容が否定的になることが示されている。

次に、ストレスフルな体験に対するネガティブ感情が脅威評価や反すうに及ぼす影響を検討するため、【研究3】では場面想定法、【研究4】では回顧法による質問紙調査を実施している。その結果、意図的熟考と体験当時の侵入的熟考が意味生成を促進し、現在の侵入的熟考のみが意味生成を抑制することが示されている。また、多くのネガティブ感情が、脅威評価や侵入的熟考と正の関連を示したが、後悔のみが意図的熟考を促進していたことを明らかにしている。

第5章では、第4章で精緻化された意味づけ過程のモデル構造の頑健性を確認している（研究5～研究6）。【研究5】では、計3回の縦断調査を実施し、2種類の反すうが意味生成に及ぼす影響と、諸変数間の時系列的な関係について検討している。その結果、第4章と同様に、積極的な意味探索をした人ほど意味を生成しているという個人間効果が確認されたが、個人内効果は示されなかったため、意味を見出すかどうかはその直前の意味探索量に影響されないことを明らかにしている。続く【研究6】では、20代から60代の成人を対象にwebパネル調査を実施している。多母集団同時分析の結果、本論文が仮定したモデル構造のうち、脅威評価、反すう、意味生成の関連については、性差や年代間差、ストレスフルな出来事の種類の差は示されなかった。したがって、第4章において精緻化された意味づけ過程のモデル構造は頑健であることが実証されたといえる。

第6章では、社会的・環境的要因が意味づけ過程に及ぼす影響を検討している（研究7～研究8）。【研究7】および【研究8】の知見を統合すると、体験当時に積極的な意味探索をするほど、実際に周囲の他者からサポートを受けやすいことが明らかにされている。そして、サポートを受け、満足感を抱くほど、意味生成が促進され、侵入的熟考が低減することが示されている。また、新たな人間関係の構築や成功体験をするなど、ストレスフルな体験後に遭遇する新たな出来事が、意味生成を促進することが示されている。さらに、意味生成を促すだけでなく、意味探索の開始や再開、中断に寄与したり、意味探索や意味の内容に変化を及ぼしたりするなど、その影響は多様であることが示されている。

最後に第7章では、研究1から研究8において収集した、意味づけに関する自由記述回答、あるいは逐語録を対象に、生成された意味の内容と意味を見出さない理由を整理し、意味を見出さない理由の特徴から、意味生成に至るまでの段階について考察している（研究Aと研究B）。

第Ⅲ部（第8章）では、第Ⅱ部の実証的検討で示した研究を統括し、得られた知見の整理を行い、新たな意味づけモデルを提案している。まず、積極的な意味探索は、ストレスフルな体験の意味生成を促進するが、侵入的で望まない反すうも促し、意味生成からかえって遠ざかってしまう場合があることを明らかにしている。また、侵入的熟考が生起すること自体は問題ではなく、むしろ生産的な意味探索や意味生成へつながる重要な要因であることが示されている。ただし、侵入的熟考が長期化したり、一定の期間経過してもその頻度が維持されていたりすると、意味生成を妨害する要因となることを明らかにしている。ここから、ストレスフルな体験直後は、不意に浮かぶ侵入的な思考を抑制したり、無理にその体験と向き合おうとしたりする必要はなく、その体験と向き合おうと自然に思うまでは、浮かんでくる思考に身を任せることも、時に必要であるということを明らかにしている。また、意味づけは、他者との交流や新たな体験から影響を受け、さらに、意味を見出した後も、意味探索を継続したり意味の内容が変容したりする、循環的な過程であることも明らかにしている。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、生きていく中で幾度となく遭遇するストレスフルな体験について、人がその出来事の意味を探索し、自分なりの理解や解釈を与える「意味づけ」によって適応していく過程を、質問紙調査（場面想定法や回顧法）や面接調査などの様々な手法を駆使して精緻に検討している。特に、従来ネガティブに捉えられがちな「反すう」を、意味づけにとって重要な要素として捉え直している点は独創的である。一方で、外傷後成長などポジティブに捉えられがちな「意味づけ」を丁寧に捉え直し、ネガティブな影響も含めて過程モデルを精緻化している点も非常に高く評価できる。

平成29年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。